光州ビエンナーレ２０周年記念特別展「甘露―１９８０年その後」
沖縄からのメッセージ

佐喜眞道夫と沖縄の美術関係者数名は、2000 年、第 3 回光州ビエンナーレを訪れました。そこで「芸術の力」を通して光州の深い傷を乗り越えていこうとする「光州精神」というべきものと出会い大変感銘を受けました。以来、沖縄の佐喜眞美術館では、現実社会と対峙するホン・ソンダム氏（2005 年）、イ・ユニョプ氏（2011 年）、チョン・ジュハ氏（2013 年）の韓国の作家たちの展覧会を開催し、沖縄と韓国の文化的つながりを積み上げてまいりました。

2014 年の今回は東アジアを代表する光州ビエンナーレが 20 周年を迎えます。その記念特別展プロジェクトのテーマ「甘露、1980 年その後」は、『国家暴力に対する記憶と証言、あるいは抵抗精神を秘めながら、またその抵抗精神や傷痕に対する治癒のメッセージを有する作品を、韓国内外の重要作家４７名の作品で構成する』というものでした。その責任キュレーターのユン・ボンモ氏より沖縄の三人の作家、金城実、比嘉豊光、金城満と、佐喜眞美術館のコレクションからケーテ・コルヴィッツの貸し出しを申し受けたことは私たちにとって胸躍る喜びでした。展覧会の成功を願い、大きな期待を持って 8 月初旬より光州を訪れ、展示作業を終え 10 日に帰国しました。その直後にユン･ボンモ氏が辞任され、ホン・ソンダム氏の作品も展示しないというニュースが届き、大きなショックを受けております。

光州にとって「光州事件」は、沖縄にとって「沖縄戦」と「押しつけられた米軍基地」と同様に、繰り返し繰り返し立ち返って考えていくべき問題だと思います。芸術は、その問題を政治の視点からではなく、人間のいのちと尊厳の問題として提案する行為であります。したがって、人びとのために作られた芸術作品というものは政治の力で止めることはできないのです。

特別展の当初の趣旨に立ち返って、責任キュレーターのユン･ボンモ氏の企画を尊重し、ホン･ソンダム氏の作品を展示することを、私たちは強く要求します。そうでなければ、展覧会の理念が崩れてつつある光州ビエンナーレに沖縄から我々が参加する意義はありません。

2014 年　8 月 11 日

光州ビエンナーレ沖縄関係者
代表･佐喜眞道夫（出品者・佐喜眞美術館館長）
比嘉豊光（出品作家）
金城満（出品作家）
上原誠勇（画廊沖縄画廊主）
翁長直樹（美術評論家）